

言語教育とコミュニケーション指数

平澤 洋一

1 はじめに

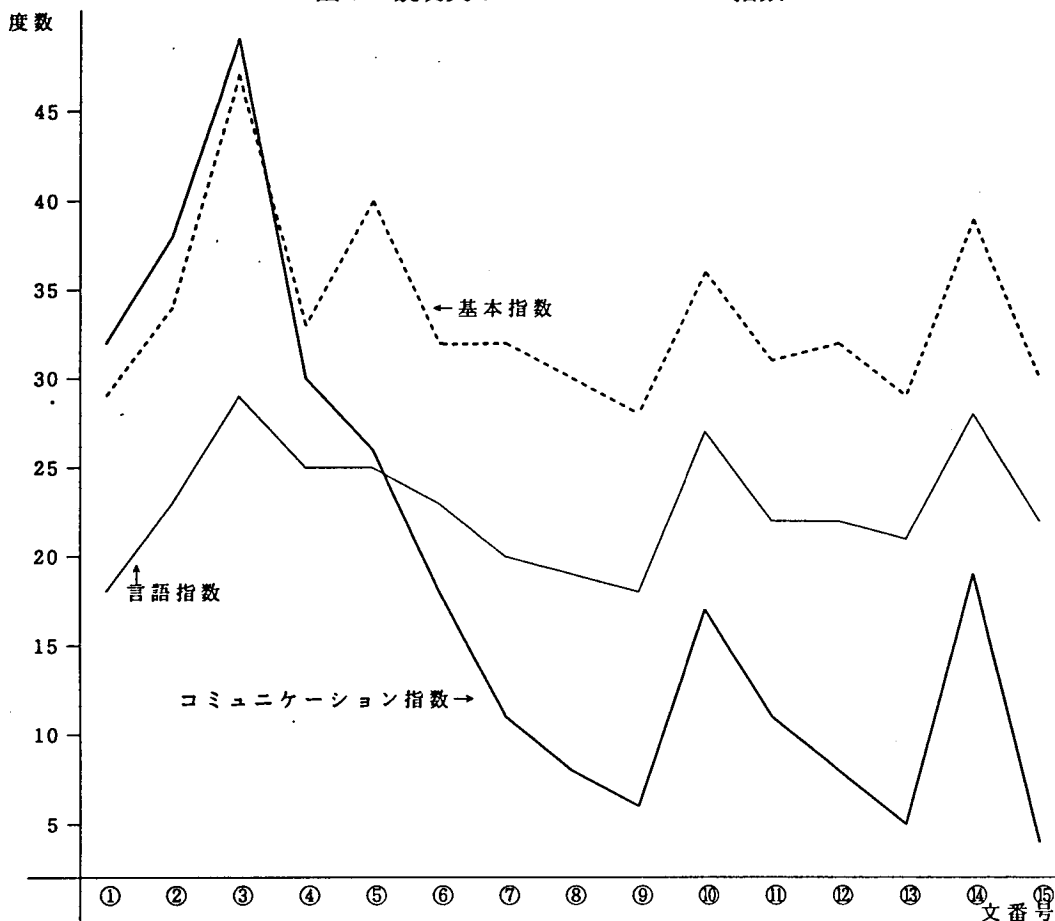
語学教育では、従来のドリル型教材に加え、言語理論の開発に裏づけられたマルチ型のコンピュータ支援教材が徐々に増えてきたが、音韻論や文法論に比べると文章論や意味論・言語行動論などの分野での理論開発が遅れている。文章論でいえば文を構成する要素の詳細な意味分析、言語行動論でいえば語や文あるいは行動が連鎖して言語行動が行われていく場合に、どのような要素が積み重ねられて「文脈」や「感動性」が動いていくのか、どのような意味特徴の束が受け手にどう認知されていくのかといった研究は、まだ本格的には始まっていない。

日常の人間行動や論理的な文章を対象にした予備調査⁽¹⁾の段階では、「文化指数」「成立条件」「言語指数」「心理指数」「非言語指数」などを総合化したコミュニケーション指数は、言語行動の冒頭部で急上昇した後、結末部に向けてかなりの傾斜度で下降していくという傾向がうかがえた。一例を図1に示す。これは川本信正氏の「素直なオリンピックを」(『中央公論』1962.11)の全15センテンスのコミュニケーション指数を示したものである。

①二年後のいまごろは、東京でオリンピックが開かれているはずである。②そのオリンピックで、日本の選手が金メダルをいくつとるかなどは、二の次の問題だ。③まずこのオリンピックを、あくまで正しい姿のオリンピックとして、世界各国の平和を愛する人びとと、よろこびをわかちあいたい。

④正しい姿のオリンピックとは、いうまでもなく「政治・人種・宗教によって差別待遇しない」という、オリンピックの最高の理念を、見事に実現したオリンピックということである。⑤ジャカルタのアジア大会は、残念ながらこの点で失敗し、スポーツの歴史に汚点を残した。⑥オリンピックにかぎらず、国際スポーツで政治不介入の原則をつらぬくためには、あらかじめ政治的な地ならしをしておく必要がある。⑦アジア大会の問題も、本質的には中国問題であり、アジア・アラブの政治的な悲劇がスポーツの舞台で演出されたのであった。⑧東京オリンピックでも、南北朝鮮の問題がある。⑨東独の国際的な立場の変化によっては、今までのように東西ドイツが統一チームで参加してくるかどうかも、予見のかぎりではない。⑩しかし、政治の介入を防ぐには政治の介入が必要だという逆説が意味をもつとしても、スポーツ組織やオリンピック準備の担当者は、いろいろな形で迫ってくる政治的な圧力や干渉を、自分たちの決意と努力ではねのけて、オリンピックの理想を守りぬくことに、もっと積極的でなくてはならない。⑪オリンピックでナショナリズムの激発を心配する声もある。⑫しかし、

図1 説明文のコミュニケーション指数



スポーツのナショナリズムは、競技のあとの安らぎを通じて、国際的な連帯感を誘いだすもっとも人間的な触媒になることを見のがさないでほしい。⑬その例はいくらでもある。

⑭東京オリンピックが素直な姿で開かれるのは、一九六四年の世界が平和であるということにつながる。⑮オリンピックに何かしら抵抗を感じる人も、このことだけは否定できないであろう。

図1に見るようなコミュニケーション指数の右肩下がりの軌跡がどの程度の一般性を有するのか——本稿では文学的な作品、ここでは「連句」に調査対象を移して一般性と有効性とを検証してみたい。

2 意味の計量化

意味の問題は、最近さまざまな研究分野で精力的に調査・分析されつつあり、語彙体系や語史、あるいは語彙的構文論などにおける意味の研究はその典型であるが、それらは単

語を主な分析単位にして意味を扱っており、言語行動論やコミュニケーション論の立場に立って詳細な意味特徴の設定を行い、それらがどのように結合しながら意味の接続をなし(3)ていくかを調査しコンピュータ解析するような研究は、ほとんどない。ここでは『猿蓑』の中であって広く知られている「夏の月の巻」の36句(岩波日本古典文学大系45『芭蕉句集』)を例に挙げ、連句におけるコミュニケーション指数の問題を考えていく。

- | | | |
|----|--|----|
| 1 | 市中は物のにほひや夏の月 | 凡兆 |
| 2 | あつし〜と門 <small>かど</small> 〜の聲 | 芭蕉 |
| 3 | 二番草取りも果 <small>はた</small> さず穂 <small>い</small> に出で | 去来 |
| 4 | 灰うちたゝくうるめ一枚 | 兆 |
| 5 | 此筋 <small>このすじ</small> は銀も見しらず不自由 <small>よじゆう</small> さよ | 蕉 |
| 6 | たゞとひやうしに長き脇指 <small>わきざし</small> | 来 |
| 7 | 草村 <small>かはづ</small> に蛙こはがる夕まぐれ | 兆 |
| 8 | 露 <small>ふき</small> の芽 <small>あんど</small> とりに行燈 <small>あんどん</small> ゆりけす | 蕉 |
| 9 | 道心のおこりは花のつぼむ時 | 来 |
| 10 | 能登 <small>ななお</small> の七尾 <small>ななお</small> の冬 <small>すみ</small> は住うき | 兆 |
| 11 | 魚の骨しはぶる迄 <small>おい</small> の老を見て | 蕉 |
| 12 | 待人 <small>まちびといれ</small> 入し小御門 <small>こみかど</small> の鎧 <small>かざ</small> | 来 |
| 13 | 立かゝり屏風 <small>びやうぶ</small> を倒す女子 <small>をな</small> 共 <small>こども</small> | 兆 |
| 14 | 湯殿 <small>ゆどの</small> は竹 <small>すのこ</small> の簀子 <small>すい</small> 侘しき | 蕉 |
| 15 | 茴香 <small>うるまやう</small> の実 <small>み</small> を吹落 <small>ふきおと</small> す夕嵐 | 来 |
| 16 | 僧やゝさむく寺にかへるか | 兆 |
| 17 | さる引の猿 <small>さる</small> と世 <small>よ</small> を経る秋の月 | 蕉 |
| 18 | 年に一斗 <small>いちと</small> の地子 <small>ぢし</small> はかる也 | 来 |
| 19 | 五六本生木 <small>みづがまり</small> つけたる <small>溜</small> | 兆 |
| 20 | 足袋ふみよごす黒 <small>くろ</small> ぼこの道 | 蕉 |
| 21 | 追 <small>おひ</small> たてゝ早 <small>はや</small> き御馬 <small>ごま</small> の刀持 | 来 |
| 22 | でつちが荷 <small>にな</small> ふ水 <small>みづ</small> こぼしたり | 兆 |
| 23 | 戸障子もむしろかこひの賣屋敷 | 蕉 |
| 24 | てんじやうまもりいつか色 <small>いろ</small> づく | 来 |
| 25 | こそ〜と草鞋 <small>わらじ</small> を作る月 <small>(4)</small> 夜 <small>よ</small> さし | 兆 |
| 26 | 蚤 <small>おき</small> をふるひに起 <small>おこ</small> し初秋 | 蕉 |
| 27 | そのまゝにころび落 <small>おち</small> たる升 <small>ます</small> 落 <small>おとし</small> | 来 |
| 28 | ゆがみて蓋 <small>ふた</small> のあはぬ半櫃 <small>はんびつ</small> | 兆 |
| 29 | 草庵 <small>くさあん</small> に暫 <small>しばし</small> く居 <small>ゐ</small> ては打 <small>うち</small> やぶり | 蕉 |
| 30 | いのち嬉 <small>せんじよ</small> しき撰集 <small>せんじよ</small> のさた | 来 |

- 31 さまへに品かはりたる戀をして 兆
 32 浮世の果は皆小町なり 蕉
 33 なに故ぞ粥すゝるにも涙ぐみ 来
 34 御留守となれば広き板敷 兆
 35 手のひらに虱這はする花のかげ 蕉
 36 かすみうごかぬ昼のねむたさ 来

この36句の意味上のつながりを考察しようとするとき、まず明白なことは、これらが歌仙形式の連句をなしているということである。村松友次氏は『宇陀の法師』（元禄15年）の一節を引きながら「芭蕉が自己の芸術の本命としたものは発句よりもむしろ連句⁽⁵⁾だ」と指摘したが、「俳諧の連歌」である連句は、発句のように独立した句に比べるとはるかに複雑な接続構造をもつ。そこで、そのような意味の接続は、それらを意味特徴の束として捉えて多変量解析し、時系列上に並べていくならば、かなり興味深い軌跡を描いて変化していくはずである。連句における意味の接続には、具体的な形態によって明示的に接続していくものと、隠れた姿で接続していくものの2種がある。同一語句の反復や直接的な論理関係などによる意味のつながりは前者に、「にほひ付」や「三句のわたり」といった歌仙形式の手法による接続は後者にあたる。

歌仙形式の連句は懐紙2枚に書かれ、初折（一の折）の表に6句、裏に12句、名残（二の折）の表に同じく12句、裏に6句を詠み込む。そして「二花三月^{に か きんげつ}」の約束により、定座では初折の表6句の5句目に月を、初折の裏12句の8句目（のちには7句目に変わる）に月、11句目には花を、名残の折の表12句の11句目に月、裏6句の5句目に花を詠まなければならない。さらに季節の面からの制約もあり、春の句と秋の句は3～5句続け、夏の句と冬の句は1句ないしは3句まで続け、恋の句も一卷に2カ所、それぞれ2句ていど続けなければならないとする。

「にほひ付」は、論理の面でも語義の面でも関係のない前句と後句が、かすかな余韻をもって接続していく手法をいう。例えば第6句の「長き脇指⁽⁶⁾」から次句の「蛙こはがる」へ、第27句の「升落」（鼠取り）から次句の「蓋のあはぬ半櫃」へ、第14句の「簀子侘しき」から15句の「茴香の実を吹落す」（この手法を対付と呼ぶ^{むかいづけ}）へというように頻繁に使われて、微妙な意味のつながりを生成している。

このほかにも規則（式目）がある。一句一句が連なって連句ができていくわけであるから、前句と何らかの意味結合をしながら接続していかなければならないが、(1)同季・同字・類似の詞・縁のある詞などを近くに置かないようにし、(2)「付句」として「前句」に付けて詠むとき前前句である「打越⁽⁷⁾」と同想にならないようにしなければならない。打越と前句と付句という3句のつながりと展開⁽⁸⁾が、連句における基本的かつ重要な意味単位となる。

発句「市中は物のにほひや夏の月」の意味の中心は「物のにほひ」と「夏の月」であり、

前者は真夏の夜の町中の匂い、むんむんとする暑さと混じって漂ってくる雑多な生活臭であり、後者は涼味を運んできた夜の月である。両者は意味的対立を保ちながら一つの句の中に存在して響き合っている。品のある句である。

脇である第2句は、発句の「物のにほひ」に対して「あつし〜」を、「夏の夜」には「門〜の声」を対応させている。そして脇にも「暑」と「涼」の意味対立が受けつがれて、発句と脇との意味の「受け渡し」がスムーズに行われていく。

3句目にいたって意味が小さく転換する。季節は同じ夏の句ではあるが、前2句が夏の夜の「暑さ」に意味の焦点があるのに対して、3句目では二番草取りも済まないのに今年も稲の穂が出てきてしまい、せわしないことこのうえない。このせわしなさを軽い余韻が4句目に引きつがれて「灰うちたゝく」「うるめ一枚」と詠まれていく。きりっとした表現である。

「二花三月」で定座どおりなのは名残5句目（第35句）の花だけ。月は初折表の発句、裏の11句目、名残の7句目、花が初折裏の3句目であるから、いずれも定座より早い位置にあらわれており、定座は守られていない。が、それだけ新鮮である。

3句のつながりと変化も、第4～6句が無季・昼餉時のせわしなさなどでつながる一方、町中から農村へ、夜から昼へ、聴覚の世界から視覚への転換、自自⁽⁹⁾他への変化もさりげない。このほか自自他は第31～33句にも見られる。

このように、連句は歌仙形式によるかなり複雑な意味特徴の束によって接続されているわけであるが、詳細に調査していくと、歌仙形式は接続要素全体のほんの一部にすぎないことが分かった。

3 コミュニケーション指数

第1句～36句までの意味特徴を明らかにするため、次の項目について調査した。

A 送信者指数＝非関与的につき下位項目は略す。

B 文化指数＝コミュニケーションレベルを統御する要素。異文化度、異言語度、位相性、支配コード（日常、論理、評価、感情、虚構、回想、想像、未経験、文芸、歴史、文字、音声、画像、映像）。

C 成立条件指数＝時、所、動機・目的、主体、焦点主体、対象1（広対象）、対象2（狭対象としての焦点対象）、共起対象（主体や対象1・2の価値や情感性を上昇または下降させる対象物）、伝達ジャンル、言語機能、主体の判断、場面心理、メディア、伝達内容、表現の調子、言語規範、言語習慣、社会規制、作品規制、伝達規制。

D 言語指数＝(1)音韻指数（音素類型、モーラ数、音節構造、アクセントの類型）、(2)文法指数（構文構造の複雑度、行為者格、経験者格、対象格、強め形式数、主文テンス、アスペクト、ムード）、(3)意味領域指数（知的意味領域、文法的意味領域、文体的意味領域、評価的意味領域、感情的意味領域、表現的意味領域、歴史的意味領域、位相的意味領域、

表1 連句の言語指数と基本指数

指数 \ 文番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
A送信者指数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
B文化指数	7	7	5	5	7	8	6	8	8	7	5	8	6	8	5	8	7	7
C成立条件指数	9	7	9	7	9	8	9	9	9	9	8	8	8	9	7	7	7	7
D言語指数	28	36	29	29	31	32	31	33	42	36	27	27	26	32	32	28	34	27
E心理指数	-1	-3	-1	-1	-3	3	2	3	5	-3	-1	3	-1	-2	-1	-3	-1	2
F非言語指数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
G受信者指数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
A~G基本指数	43	47	42	40	44	51	48	53	64	49	39	46	39	47	43	40	47	43

指数 \ 文番号	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
A送信者指数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
B文化指数	5	7	6	5	7	5	5	7	5	5	6	7	9	7	8	6	7	7
C成立条件指数	9	9	9	9	8	7	9	9	8	8	8	8	8	6	7	7	9	7
D言語指数	29	31	27	30	29	28	31	33	25	26	24	27	32	29	36	25	37	31
E心理指数	-1	-1	-1	1	0	-1	1	-2	-2	-3	0	3	2	-2	-3	-1	2	1
F非言語指数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
G受信者指数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
A~G基本指数	42	36	41	45	44	39	46	47	36	36	38	45	51	40	48	37	55	46

表2 コミュニケーション指数

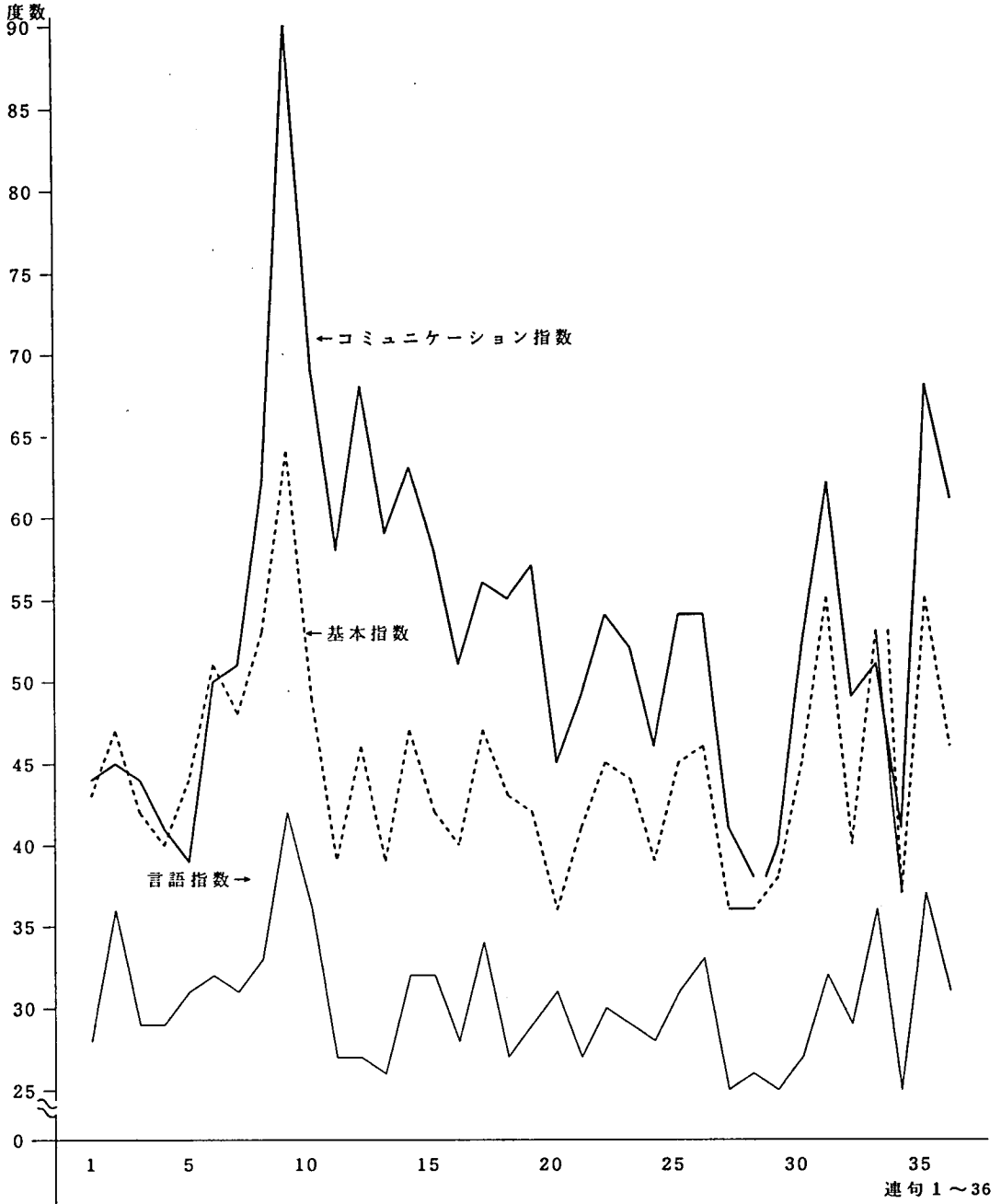
指数 \ 文番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
A~G基本指数	43	47	42	40	44	51	48	53	64	49	39	46	39	47	43	40	47	43
プラス感情化指累積	3	3	8	8	8	12	16	22	39	39	39	43	43	43	43	43	43	46
マイナス感情化指累積	-2	-5	-6	-7	-13	-13	-13	-13	-13	-19	-20	-21	-23	-27	-28	-32	-34	-34
コミュニケーション指数	44	45	44	41	39	50	51	62	90	69	58	68	59	63	58	51	56	55

指数 \ 文番号	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
A~G基本指数	42	36	41	45	44	39	46	47	36	36	38	45	51	40	48	37	55	46
プラス感情化指累積	46	46	46	47	47	47	48	49	49	49	49	54	58	58	58	58	68	70
マイナス感情化指累積	-35	-37	-38	-38	-39	-40	-40	-42	-44	-47	-47	-47	-47	-49	-53	-54	-55	-55
コミュニケーション指数	53	45	49	54	52	46	54	54	41	38	40	52	62	49	51	41	68	61

地域的意味領域、文化的意味領域、その他)、(4)語彙指数(天空語彙、天候語彙、季節語彙、時刻語彙、地語彙……)、(5)評価・感情度、(6)文体指数(自我のありよう、モチーフ、物語性、直叙性、説得性、視座、視点移動性、言語規範、一文の名詞率、人格語、語彙表記、待遇度……)、(7)表現指数(感覚型表現、韻文型表現1、韻文型表現2、その他)、(8)接続指数(接続相手=語句、焦点化枠、照応枠、対立枠、補足枠、余韻枠・連想枠、転換飛躍枠、接続方向=同内容、類概念、対立、余韻・連想、回想、転換・飛躍、接続方法=主題語、同一語句、言い換え、類語、余韻・連想語、対立語、転換・飛躍語、歌仙形式、初折/名残、表/裏、二花三月、季節、恋の句、にほひ付、自他の変、三句のわたり)、(9)新鮮化指数(小転換、飛躍……)、(10)倦怠化指数(同一語累積数、主題語、同一手法累積数)。

E心理指数=(1)プラス心理指数(パイディア、うれしい、面白い、ユーモラスだ、懐かし

図2 コミュニケーション指数の軌跡



い、美しい、よろこび……)、(2)マイナス心理指数(貧しい、寂しい、暑い、せわしない、汚い、わびしい……)、(3)中立心理指数(疑問、不思議さ、不透明感……)。

F 非言語指数=非関与的につき下位要素は省略。

G 受信者指数=同上。

長くなってしまったが、これらの意味特徴のすべてを36句について調査し、コミュニケー

シヨンの基本構成要素であるA～Gを総合化した「基本指数」を整理したものが表1、言語指数および基本指数をコミュニケーション指数とともにグラフ表示したのが図2である。この図から明らかなおと、第8句と9句がこの連句における基本指数のピークであるが、実は「恋」を描いていて情感性の頂点をなす句でもある。第8句「落の芽とりに行燈ゆりけす」から次句「道心のおこりは花のつぼむ時」への意味の受け渡しがまことに鮮やかである。命じられた腰元か誰か若く美しい女が邸内に落の臺をとりについて、ふっと行燈の火が消える。闇が広がる。恋の暗示か——無常の世界、道心のおこり。芭蕉ならではの90度の場面転換である。散文の段落換えや話題転換などよりはるかに鮮やかな転換であり、これはコミュニケーション指数にもはっきりあらわれている(表2)。

人間の言語行動における基本的なコミュニケーション指数を簡略化して示せば「コミュニケーション指数＝基本指数＋プラス感情化指数－マイナス感情化指数」となる。プラス感情化指数というのは、文字作品でいえば、読み手の感情性・情緒性を高めてくれる意味特徴をいい、具体的には「プラスの評価・感情度＋新鮮化指数＋主題文指数＋プラス心理指数」などからなる。新鮮化指数は連句における場面の「小さな転換」や「大きな飛躍」を指し、一般的な文章や映像を使用したコミュニケーションの場合には「段落換え」「章換え」「シーン転換」「フェード・アウト」などがこれにあたる。また、主題文指数というのは、いわゆるキーセンテンスの有する指数であり、それらのプラス感情化指数は、いずれも受け手側・読み手側の気分を変えたり重要な伝達内容を担ったりする意味特徴の束で構成されている。

これと反対なのがマイナス感情化指数であり、「マイナス評価・感情度＋倦怠指数＋マイナス心理指数」からなる。倦怠指数は「同語の繰り返し」「同手法の反復」「紋切り型表現の多出」などの意味特徴からなる(しぐさや身振りのようなノンバーバル・コミュニケーション要素を含んだ言語行動の場合には、「周辺言語の繰り返し度＋身体信号の繰り返し度＋報道・変化の繰り返し度」も追加される)。「夏の月の巻」には、プラス評価・感情の句よりマイナス評価・感情の句がはるかに多く、これは『奥の細道』に出てくる俳句(54句ある)などと比べると著しい違いである。

このようなさまざまな意味特徴の束が総合化されたコミュニケーション指数の動きをグラフにしたのが図2である。この図を見ると、連句1～36の言語指数は度数25～35の範囲での小幅で平坦な変化をしているにすぎないので、連句を「表面にあらわれた語句」つまり言語指数だけで捉えてしまうと、連句のもつ情感豊かなおもしろさや「にほひ付」による余韻的接続のすばらしさに気づかない「浅い読み」に終わってしまうことに気づかされる。言語指数に比べると、コミュニケーション指数には、「プラス評価・感情度」「プラス心理指数」「新鮮化指数」などプラスの意味特徴の束と「マイナス評価・感情度」「マイナス心理指数」「倦怠指数」などのマイナス意味特徴の束とが相互に影響し合った起伏の激しさが反映されており、連句を一つの芸術にまで高めた芭蕉の息づかいが伝わってくる。

図3 連句のデンドログラム

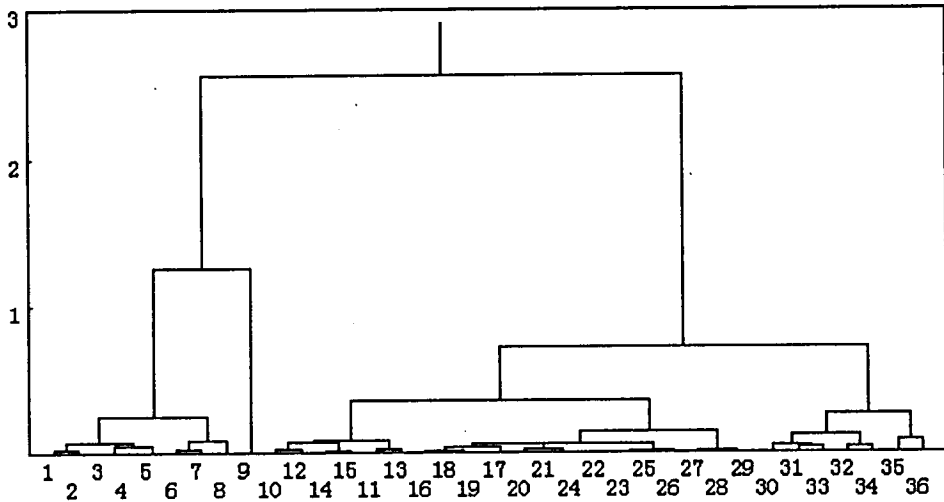
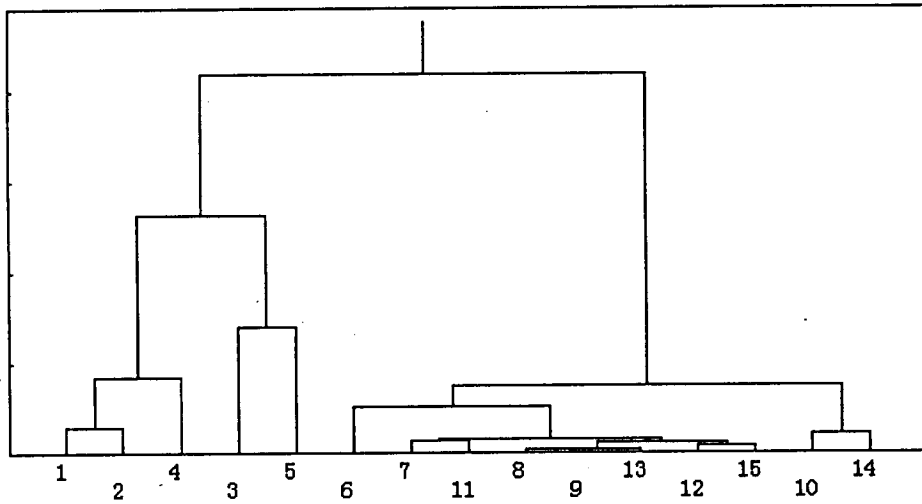


図4 説明文のデンドログラム



「夏の月の巻」のコミュニケーション指数のグラフは、第9句を頂点にして右肩下がりのトレンドを見せているが、これは多くの文学作品に観察される一般的な傾向である可能性がある。また、連句の終末部に位置する第35句において指数68というかなり高い盛り上がりを見せるのも、小説やドラマのクライマックスに似た構成法のあらわれである。散文でいえば、キーワードを集めて論理的なまとめの段落を迎えたところにあたる。

図1と図2のコミュニケーション指数のグラフを比較すると、図1ではほぼ一貫して右肩下がりであるのに、図2ではかなり急に下げた後にもう一度「毛抜き天井型」の頂点を形成しているという違いがある。その理由は、散文では一般的に「主題語」（キーワードの

中心をなす語)を繰返すことで文章が展開していくのに対して、連句では「同字」「類似語」「縁のある語」などを厳しく禁じているからであろう。したがって、「にほひ付」による余韻で前句とつなぎながら常に新鮮さを失うことなく展開されることになり、これこそが連句の「技の妙」といえよう。また、図1の基本指数のピーク値が47にすぎないのに、図2では64と高くなっており、論理性主体の説明文に比較して連句では格段に高く、複雑な言語情報の内包されていることが読みとれる。

図3は表2から「基本指数」「プラス感情化指数」「マイナス感情化指数」の3変数を選択して数値をクラスター分析(表2の連句1~36相互の非類似度はユークリッド平方距離、分析法は群平均法を用いた)した結果をデンドログラムで表示した図である。発句から第9句までがまとまったクラスターをなし、第10~36句のクラスターと意味的に対立している。やや細かく見れば、発句からコミュニケーション指数がピーク値をつける第9句までの流れが終わると、第10~30句という「初折の裏の大半」+「名残の表」がひとまとまりをなして続き、「名残の裏」である第31~36句がクラスターをなして接続している。そして、図3ではほとんどの句のクラスターが高さの非常に低い位置で交差しており、連句の各句相互の類似度が非常に高いことがこのデンドログラムに反映されている。

これらのことを図4と比較してみよう。この図は図3と同様の手順で「素直なオリンピックを」を多変量解析して得たデンドログラムである。図3ではほとんどの句が非類似度0.1以下というきわめて相関性の高い意味関係で並んでいるのに対し、図4では文⑦~⑬あたりに類似度の高い部分が散見される程度である。しかも、図3に比べると図4では小クラスターの交差位置が高くなっており、連句の場合ほどには各文の意味関係が密接ではない。

4 おわりに

正岡子規が、連句は場面も主題も次々と変わるから一卷を通じて「一つの文学」とはいえないと指摘したことについて、村松友次氏が「それは発句の統率力を見落とした言である」「前編を統率しているのは、発句の調音であり、途中で、人事・天然の百般に変化するのも、やはり発句の変奏曲であったのである」と反論した⁽¹⁰⁾のは周知のとおりであるが、村松氏の主張は、コミュニケーション指数の面からも首肯できる。

本稿では、句と句あるいは文と文が接続していくときには、「文化指数」「成立条件」「言語指数」および「心理指数」が強く関与し、「倦怠指数」を中心とする「マイナス感情化指数」が、時間の経過につれて、新鮮で感動的な情報伝達を阻害化していくことを、連句と説明文で考察した。意味の伝達における「新鮮化」や「倦怠化」は、授業内容の理解力や教授法の問題ともからんで、教育の現場では重要な要素となる。

日本語教育においても、文章論や意味論に関する実証的な研究成果を可能なかぎり取り込んだコンピュータ支援教材を開発し、それが教育の場にもっともっと活かされてくる必要があると思われる。今後さらに調査範囲を広げて、理論の検証を試みたい。

注

- (1)行動分析は「非言語行動の意味」(『国文学 解釈と鑑賞』60巻1号、1995)、「伝達信号と認知差」(中條修編『論集 言葉と教育』1996)、論理的文章は「C A I教育における言語信号と非言語信号」(第20回教育システム情報学会全国大会発表要旨、1995)などで結果を報告した。
- (2)『城西文学』(城西大学女子短期大学部)24号、1998を参照。
- (3)佐藤公治『認知心理学からみた読みの世界』(北大路書房、1996)、平澤洋一『日本語語彙の研究』(武蔵野書院、1996)などがある。
- (4)「つくよ」。
- (5)村松友次「芭蕉と連句」『芭蕉』(鑑賞 日本古典文学 28巻、角川書店、1975)221頁。
- (6)「夏の月の巻」36句に対する「にほひ付」の具体的な解釈は『芭蕉句集』(岩波古典文学大系45)に従った。
- (7)これらを近くに置いたため、意味が衝突し表現効果の失われることを「^{さしあい}指合」といい、指合を避けるため「三句去り」(三句距てよ)、「七句嫌う」(七句距てよ)と規定したものを「^{さりきらい}去嫌」という。
- (8)これを「三句のわたり」という。
- (9)自は自の句(作中人物自身が話者になっている句)、他は他の句(第三者が作中人物を見て詠んでいる句)の略。「自他の変」といって、自自他か他他自になるように並べるのが規則。句を挟んで同想になることを避けるためである。すでに登場している人物に向かって他の人称の人物を出すことを向付^{むかいづけ}という。
- (10)上掲(5)と同書。259頁。